スターリン氏の招待

二人の青年秘書の記録

松山　繁
中尾和夫　共著

中尾に発行されたモスクワのメーデー参観許可証

光　文　社

読者へお願い

「読後の感想」を、左記あてに、お送りいただけましたら、ありがたく存じます。

東京都文京区音羽町三ノ一九
光文社出版局
神吉晴夫

昭和二十七年十一月三十日初版発行
昭和二十七年十二月十五日四版発行
定価 二三〇円

スターリン氏の招待

著者 松山繁
中尾和夫

発行者 神吉晴夫
印刷者 山元正宜
印刷所 三晃印刷株式会社
東京都文京区柳町二六

発行所 株式会社 光文社
東京都文京区音羽町三ノ一九
電話九段(33)一三一—一三九
振替東京 一一五三四七番

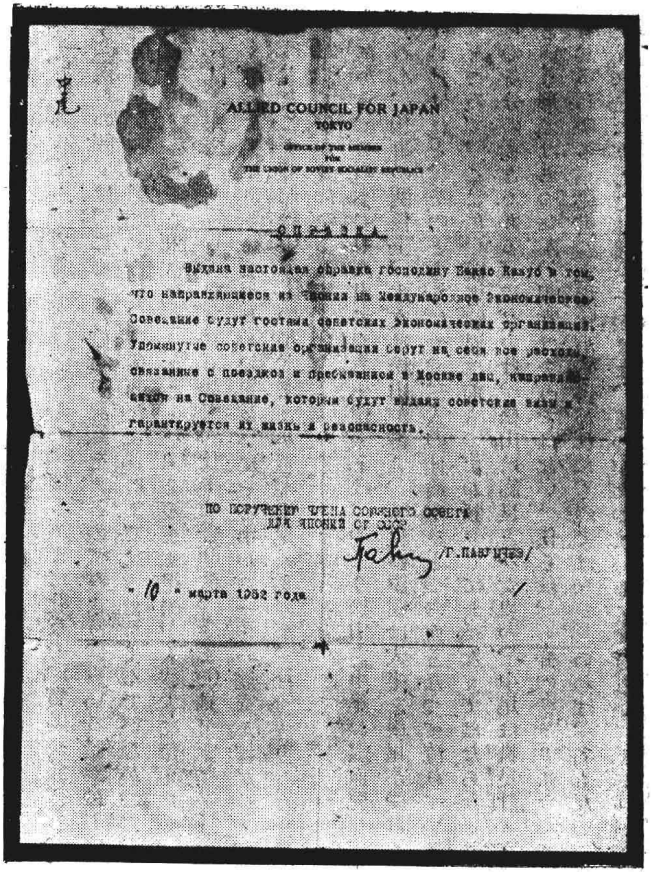
(三幸製本)

はじめに

一九五二年五月、ソ連の旅行をおえて、僕らがまだ北京で、貿易会談にたずさわつていたころ、すでに僕らの間では、こんどの旅行の記録をまとめてみよう、という話がはじまつていた。もちろん、それをどういう形にするか、具体的なことにまでは考えおよんでいなかつた。しかし、ただ、この目で見たり、この耳で聞いたりしたことを、そのまま祖国の人びとに伝えたい、という点では、二人の意見は、完全に一致していた。そこで、仕事の合間に、今まで見てきたソ連の実態について、僕らはよく議論をするようになつたが、しだいにその中から一つの筋道が浮かびあがつてきた。やがて、それは、どこまでが松山のものか、どこからが中尾のものか、はつきりしないほど、一つのものに、とけあつてしまつたのである。

だから、この本の中に出てくる「僕」とは、つまり松山と中尾の混血児だ、ということになる。もちろん、仕事の関係上、本文は松山が書き、写真の説明は大半を中尾が受けもつといつた形で、分担はしたけれど、そのどちらにも、二人の体験がひとつの血となつて流れている。

ところで、ここに、読者諸君に前もつてお断りしておかなくてはならないことがある。それは、僕らの身分のことである。滞ソ中は、松山は高良とみ女史の、中尾は帆足計・宮腰喜助両氏の「秘書」という形ではあつたが、現在はそうではない。僕らは、一介のサラリーマンである。そこで、この本も、いわゆる「秘書の立場」から書かれたものではない。いわば、名もない一生活者として僕らが見たり話したりした体験をそのまま、ものがたつているにすぎない。



ALLIED COUNCIL FOR JAPAN
TOKYO

OFFICE OF THE MEMBER
FOR
THE UNION OF SOVIET SOCIALIST REPUBLICS

СПРАВКА

Выдана настоящая справка господину Такао Накуо в том, что направляющееся из Японии на Международное Экономическое Совещание будут гостями советских экономических организаций. Упомянутые советские организации берут на себя все расходы, связанные с проездом и пребыванием в Москве лиц, направляющихся на Совещание, которым будут выданы советские визы и гарантируются их жизнь и реальность.

ПО ПОРУЧЕНИЮ ЧЛЕНА СОЮЗНОГО СОВЕТА
ДЛЯ ЯПОНИИ СССР
/Г.ПАВЛИЧЕВ/

"10" марта 1952 года

モスクワで開催された国際経済会議へ招待された著者中尾和夫に宛てた保証状で、モスクワ滞在の費用、および生命と安全が保証されている。

この本の中から「御高説」や「御意見」をくみとろうとする読者諸君があつたら、がつかりするだろう。その反対に、しみじみとソ連の人間にふれてみたいと思う人びとならば、なにものかを感じとられるにちがいない。僕らは、ぜひ、そういう方がたに読んでいただきたいと願つている。僕らは、この本で、われわれと同じよう

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

に、血と涙と笑いを身につけたソ連の名もない人びとを描こうとしているのである。それしか、僕らにはできない。僕ら自身が民衆の一人なのだから。

しかしながら、僕ら二人を、ひとつの体験にむすびつけた、というのは、ただ民衆という立場からだけではなかつた。僕らが、ともに三十歳前後の青年であるということもあつただろう。それにもまして、二人をひとつに、しつかり結びつけているのは、「祖国」という存在だつた。僕らは外国にいる日が重なれば重なるほど、強く祖国をおもいはじめていた。日本にいたころは、その胸に抱かれているためか、それほど切実に感じなかつたが、三ヵ月の旅は、強烈な響きを立てる鐘のように、僕らの胸に「祖国」という言葉をひびかせた。僕らはソ連に来てはじめて、今までよりも、はつきりした形で祖国を認識し、日本民族への郷愁をすら感じたのである。そうはいうものの、僕らが認識した祖国は、決して外国のすべてに対立したものではない。それはむしろ、平和な姿のうちに、外国とならんで歩んでゆける日本という形をとつていた。

そういう意味からも、僕らはこのソ連旅行の体験を、なんとか、祖国と民族のために役だてたい、と願つてやまなかつた。この本は決して、ソ連のために書かれたものではない。むしろ祖国と世界の永久の平和をねがう、日常平凡な日本人のために書かれたものである。

こう考えてくると、さきほど、文中に出てくる「僕」とは、松山と中尾だといつたが、じつは、今、この本を読んでいる「あなた」が「僕」になつていただけたら、という願いが僕らの胸にわいてくる。これは、まことに不遜なお願いかもしれないが、その万分の一でもかなえられたら、僕らの訪ソ旅行も無駄ではなかつたことになるのである。

一九五二年十月十三日

松山繁・中尾和夫

目次

はじめに……一
一　「鉄のカーテン」をくぐる……九
二　招かれた人びと……二九
三　モスクワ・ホテル……三六
四　国際経済会議……四一
五　アメリカの記者……四六
六　「お晩でございます」……五〇
七　みなし児の祖国……五五
八　歌劇と饗宴……五九
九　モスクワ会議のなかの日本……七七
十　モスクワ街頭……八五

十一　岡田嘉子さんのこと……九七
十二　モスクワの女たち……一〇七
十三　ネムゼル氏とニホーチン氏……一一八
十四　モスクワ名物……一二六
十五　グロムイコ氏との会見……一三六
十六　スターリングラードへ……一四六
十七　ママイフの丘……一七一
十八　メーデー前のモスクワ……一七六
十九　赤の広場のメーデー……一八六
二十　さらばモスクワ……二〇三
二十一　「異国の丘」……二〇八
二十二　ハバロフスク……二三一
二十三　イルクーツクから北京へ……二四〇

松山・中尾主要日程

昭和二十七年四月三日　高良とみ・松山繁両名ヘルシンキを汽車で出発、ソ連に向かう。
四月四日　フインランドとソ連の国境を通過し、レニングラード着、直ちに空路モスクワに向かう。
四月五日　高良・松山、国際経済会議に出席。
四月十六日　国際経済会議終了。
四月二十四日　高良・松山スターリングラードへ。
四月二十六日　帆足計・宮腰喜助・中尾和夫ヘルシンキ発、ソ連に向かう。
四月二十七日　帆足・宮腰・中尾レニングラード発汽車でモスクワに向かう。同日モスクワ着。
四月二十八日　高良・松山スターリングラードから帰り、帆足・宮腰・中尾と会う。
五月一日　メーデー参観。
五月八日　高良・松山ハバロフスクに出発。
五月十日　高良・松山ハバロフスク着。
五月十二日　高良・松山ハバロフスク発、空路イルクーツクに帰る。
五月十三日　帆足・宮腰・中尾モスクワ発、空路イルクーツクに向かう。
五月十四日　帆足・宮腰・中尾イルクーツク着。
五月十五日　全員空路北京に向かう。

スターリン氏の招待

著者紹介

松山　繁氏（本名　村上道太郎）

一九一九年、高知県に生まれた。

一九四一年、中央大学法学部卒業。

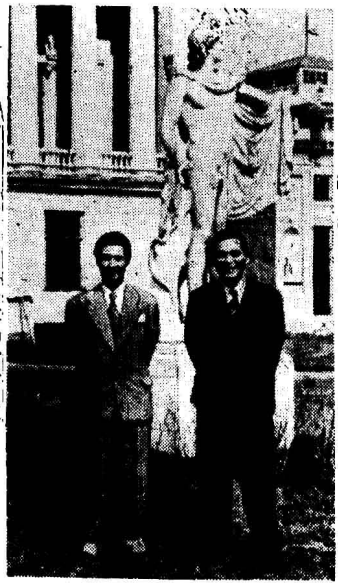
一九四二年、応召して渡満、翌年幹部候補生隊に入隊。敗戦後シベリアに抑留生活四年を送り、

一九四五年、帰国後、学徒援護会に勤務する傍らグリン・クロス運動書記長を兼任。

一九五二年、高良とみ女史とともに、パリにおけるユネスコの国際建設奉仕団会議に出席、ソ連、中国を「秘書」として旅行して帰国した。現住所　東京都渋谷区代々木西原町九五〇。

中尾和夫氏

一九二二年、朝鮮京城市に生まれた。（本籍奈良県）



モスクワのオスタンキ博物館前にて
向かつて（右）中尾氏（左）松山氏

一九四二年、早稲田大学入学後翌年十月、海軍予備学生として入隊。一九四五年、海軍中尉として復員。一九四九年、衆議院主事となり、つづいて一九五一年、宮腰喜助代議士の秘書となる。

一九五二年、宮腰、帆足両氏とともに、ヘルシンキをへて入ソ、モスクワの赤の広場のメーデーを参観後、中共を視察して帰国した。

現住所　東京都渋谷区代々木上原町一二〇一。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

一「鉄のカーテン」をくぐる

僕のポケットには、国章のちがうパスポートがはいつていた。あの黒い表紙の、日本国政府という金文字があり、日本の国章のはいつている。パスポートは、これからは役にたたなかつた。その中には、このパスポートはソ連および中国には通用しないとかいてあつた。

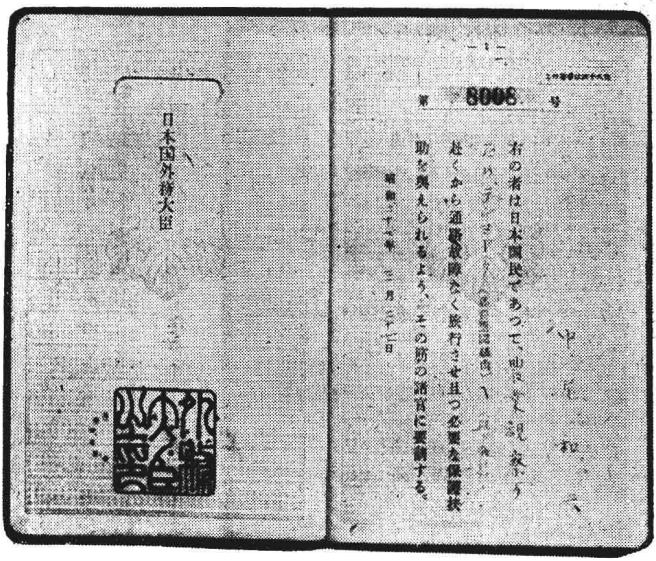
著者中尾に下付された日本政府発行の旅券の内部の注意事項

旅券に関する注意

1. 旅券の交付を受けた者は、旅券面所定の場所に署名しなければならない。
2. この旅券は、渡航先国の官憲が査証または入国許可を與えない限り、その国には通用しない。
3. 旅券の交付を受けた者が、旅券の日付から6箇月以内に出国しないときは、旅券は効力を失う。
4. 旅券の交付を受けた者が、帰国したときは、旅券は効力を失う。
5. 効力を失つた旅券は、直ちに外務大臣または交付を受けた都道府県知事に返納しなければならない。
6. 旅券を紛失し、または毀損した者は、直ちに外務大臣または交付を受けた都道府県知事にその旨届け出なければならない。届出の後にその旅券を発見した場合においても、また、同様とする。

手続きはソヴィエトまたは中華人民共和国には通用しない

そこで僕は、日本のパスポートをシースの奥にしまいこみ、三日まえ、デンマークのコペンハーゲンでソ連大使館がつくつてくれた、臨時の紙製パスポートを内ポケットに入れなおした。そのパスポートには、地球を麦の穂でうけとめ、麦の穂を十六共和国の名入りのリボンでぐるぐるまいてある、ソ連の国章がついていた。ひらくと、パスポート所持者の名、生年月日、国籍などのほかに、モスクワへ



日本政府発行の旅券の内部

行くために、レニングラード、その他の通過を許可するということが書いてあつた。

ソ連行きの汽車は、真夜中に、フィンランドの首都ヘルシンキを出る。それも駅というものがあるわけではない。ヘルシンキの郊外で倉庫が立ちならんでいる、ひつそりしたところから出発するのである。おそらく引込線なのであろう。きつとソ連とフィンランドとを行ききする客がすくないので、駅の必要がないのかもしれない。僕らが乗つた汽車だつて、貨車が全部で、そのあとに臨時に客車が一輛つながれていたにすぎない。それは緑色にぬられていた。中央に、例のソ連の国章がかいてある。長さにくらべて背の高い、不安定な感じのする車だ。おまけに、もう何年来、ぬりかえたこともないらしく、夜目にもすすけて見える。あたりがひつそりしているうえに、汽車もそんな調子なので、何かもの悲しい感じがした。

人といつては、僕らをおくりに来ているソ連

公使館の人が五、六人いるばかりだ。四月だというのに、建物のかげには雪がのこつていて、凍りついている。日本を出るときは、こんなところまで来るとは夢にも思つていなかつたので、僕は春の服を着ていた。ここは、日本の十二月より寒い。

ロイド眼鏡をかけた、若いソ連公使館員がよつて来て、

「ご安心ください。明日のひるごろには、レニングラードにつきます。夕方モスクワ行きの飛行機がでるはずですから、今ごろはモスクワです。レニングラードでは、ホテルから迎えにきていますよ。」

と、達者な英語で話してくれる。先のことを教えてくれて、ありがたいことにはちがいないが、とにかく寒いし、僕の心のなかにある一抹の不安はきえない。

「まだ乗れませんか？」

「ええ、もうすこしお待ちください。いま、車内のわりふりをやつておりますから。」

汽車の窓には、さつきから、いそがしそうに行ききしている中年の婦人の顔が見えた。その女は、ときどき、おりてきては、ロイド眼鏡の指示をうけて、ふたたび車中に消えていつた。

僕は寒さと退屈をまぎらすために、貨車のそばを、ぶらぶら歩きはじめた。カンテラをもつた工夫が、貨車の下をのぞきこんでは車輪の点検をやつている。ときどき、車輛をたたく金槌の音が、とてつもなく、かん高い音をたてて、暗い夜空にひびいた。

若い公使館員は、僕に、（ご安心ください。）と言つた。しかし僕は、それだけで安心するわけにはゆかなかつた。昔はそうでもなかつたのだが、戦争を体験してから、どうも人の言葉が信用できなくなつてきた。それと反対に、事実をみよう、という気もちがつよくなつてきた。事実だけが信じられるような気がするのである。僕はふと、パリで親友に持たせてかえした、恋人への手紙のことを思い

だした。高良とみ女史から言われて、ソ連に行つてみようと決心したとき、僕は何も知らないでいる恋人に手紙をかいた。

（心配しなくてもいい。）

その手紙は、そういう文句ではじまつている。そのとき僕は、彼女を安心させるつもりで、その言葉をかいた。その愚かさが、いま、僕に分かつたのである。僕はひとりで苦笑した。安心ということは、事実がはつきりしたときに割りきれることなのだ。そんなふうに、僕は考えた。僕が無事にかえつたときに、誰も彼もが安心してくれるにちがいない。僕は、単純にそうきめこんだ。だからといつて、何か、とてつもない冒険をやりにゆくのだという興奮した気もちもわいてこなかつた。

僕は一介の鞄持ちにしかすぎない。これによつて立身出世の道をひらくとか、これによつて世の中に貢献する、などという大それた野心もなかつた。帰つたら、またもとのところで腰弁のサラリーマンになろうと思つていた。しかしながら、たつたひとつ燃えている欲望があつた。それは未知の世界を知りたいという気もちである。あるいはそれによつて、アダムとイヴのように、永久に罰せられることになるかもしれない。それでもいいと思つた。この目で見、この耳で聞いた事実をとおして、たつた一つの真実にふれたい、というのは、僕の切実な願いだつた。その願いが僕をソ連におしやつた。

車内の用意ができたらしい。にわかに人びとがざわめきはじめた。気がついてみると、人の数もふえている。いつのまに来たのか、花束をかかえた外国代表団が、しきりに公使館の連中と握手をかわしている。そんな有様を見ていると、僕はやはり日本人として来ているのだ、という気もちが反射的に胸にひらめいてきた。僕は、例のロイド眼鏡をかけた若い男と握手をして、車内にはいつた。日本の一等寝台車とおなじ作りになつていて、進行方向にむかつて左側に廊下があり、右側に部屋がなら

んでいた。入り口で、中年の婦人が、
「ナンバー・6。」
と、僕の部屋をおしえてくれた。
汽車のなかは豪華だつた。廊下には分厚な絨毯が一ぱいにしきつめられ、シャンデリアのような電燈が、あかあかとかがやいている。赤地に花模様のある絨毯は、芝生のようにやわらかだつた。あたたかい空気が、入り口のほうから流れてくる。きつと、ペーチカをたいているのだろう。貴族的な雰囲気が、この車にはあふれている。
僕は自分の部屋の前にきて、ピカピカにみがかれた真鍮の把手(とつて)をまわし、重いドアをあけた。そこには、上下二段になつて、二つの寝台が用意されていた。高良女史と同室なのである。これは、ちよつと不愉快に思つた。いくら老人でも、あいては婦人である。常識がない、と思つたが、一晩のことではあるし、と考えなおして、なにも言わないことにした。
部屋のなかは、よくできていた。机や椅子もあり、机の上には古風なスタンドもおかれていた。おどろいたことには、部屋の一角に、さらに、もう一つの部屋があつて、鏡ばりのドアをあけると、洗面所になつていた。タオルも、ちゃんと用意されている。コックをひねると、熱いお湯も出るようになつていた。ただ、こまつたことは、荷物棚が、はるか天井に近くついているので、荷物のあげおろしには、いちいち椅子に乗らなければならないということであつた。それに上段のベッドも、機械体操の鉄棒ぐらいの位置にあり、どこから、どうよじのぼつていいのか見当がつかなかつたが、汽車が動きだしてから、ボーイが踏台をもつてきてくれた。
汽車はまだ出ない。十一時五十五分に発車する予定である。いちおう、部屋におちつき、荷物を部

屋に入れてから、僕は廊下に出てみた。廊下では、あとから来た外国代表団とソ連公使館の連中が、何かじようだんを言いながら、ときどき笑い声をあげていた。そのこちら側で、目のきつい小柄のロシア人が、僕のほうを、じつと見ている。その男は、中ごろの部屋にいた。さつき僕が乗つてくるときも、部屋のなかから、じつと僕を見ていた。あるいは、僕らを監視しているのではなかろうか。

僕は、そつと内ポケットに手を入れてみた。さつきホテルで入れかえた、ソ連のパスポートが指にふれた。いま、ここで頼りになるのは、このパスポートしかない。ここは異国である。パリやロンドンあたりとちがつて、日本人もいない。まわりは、すべて見知らぬ他人である。しかも、言葉も風習もちがう異国人ばかりである。その中を、これから何ヵ月か、たつた二人きりで旅してゆかねばならない。いくら僕が、片言まじりのロシア語ができるからといつても、ソ連は国柄のちがう国である。まさか、命までとられる、とは思わないが、苦難は雪のように身にふりつもつてくるであろう。しかし、僕は卑屈にはなるまいと思つた。いくら政府が僕の一身を保障してくれなくても、パスポートを出さなかつた今の政府だけが日本ではない。

そう思うと、急に心がひろくなつてゆくような気がしはじめた。頼りになるのは、異国のパスポートだけではなかつた。もつと深く、もつと広く、僕の心の奥そこを流れ、幾千万の同胞の心をながれている、(もう一つの日本)があつた。それは信じることができる。

この発見は、僕の心に余裕をあたえてくれた。今まで、胸のなかでからみあつていた、二つのパスポートの問題もとかれてゆき、これはこれ、あれはあれという形で落ちついていつた。さつきから、じつと僕を見ているロシア人の目つきも、それならそれという形で割りきれてきた。

僕は、外国代表団のほうに近づいていつた。いままで話していた三人の外国人は話をやめた。ロイ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.